

水彩畫研究所四月月次會の記

殘んの花は一片毎に春を送り盡して、あはれ帝京の春今將に暮なんとす、野に立つて行く春の曲を歌ふものは誰ぞ、傷ひ哉岸に佇めば、江水春を流して水に音なく、仰て天空を望めば、白雲岫頭に湧いて西風坐るに寒し、あゝ我昨夜落花を夢み、三春の行樂未だ盡ざるに滿目荒寞の景、覺めて此痛恨の思を如何せん、

今朝南風高く吹て、雲の帷は忽にして散しぬ、曙光融々青霞一抹已に我心新なり、東郊西疇た、菜花黃に青麥秀て、村々落々迥かに筑波の頂を望む時、突如脚下より翔けり立ちて、みるがうちに青空高く飛ひ上り薄絹の如き霞に漂ひつゝ歌ふものは雲雀ならずや、自然の美觀、不可言の妙趣、美神の懷ろに抱かるるものは幸いなるかな、

此日(四月二十八日)墨堤百花園に同好の月次會は開かれたり、舟よりするもの、車よりするもの、先つもの、後るもの、やがて二十幾名と注せられぬ、

人集まる頃天殘なく晴れ渡れり、初夏の風心よく肌を吹てまづ其快言ふべからず、早く已に三脚を据へてイーゼルに向ふもの、歩々手をとつて園中を逍遙するもの、花を寫すもの、草を賞するもの、語るもの吟するもの、心ゆく此日なるかな、

園は櫻桃花已に散れども、枝葉榛々たる常盤樹のうち楓の新緑滴たるが如く、芳草地を綴つて露に濡ふ、牡丹あり開くものは

淡紅、開かざるは純白、藤の紫、躑躅の紅、名も知らぬ渡り花、奇葩をひらき異香を放つ、汀の柳、竹の叢、而して狂蝶痴蜂未だ春夢より覺めず、池水の漣燦々として光り輝く、

三々五々の客又春を追ふて來る、衣香道に迷ひ、簪影地に印す、園の聯に曰く春夏秋冬花不斷東西南北客爭來と、實に其名に背かず我等が會又其處を得たりといふべし、

午後一時一堂に會して例會に移る、河合丸山大下の三先生、生徒某某等二十五名、集る所の繪畫百有參十點、僅かに一ヶ月の作品實に盛會なりといはざるべからず、氣候溫和郊外の春蟄するもの驚き葩するもの萌する時、各自彩筆を揮ふ又宜なりといふべし、惜むらくは室せまく悉く之を壁間に掲ぐるゝと能はず、已むなく床上に列れて批判す、紅黃綠紫花よりも妍也、園中の客亦顧みて過く、羅綾の衣よりも美也、淡々として瀟洒なるは甲某氏の繪、周到にして濃彩なるは乙某氏の繪、或は緻密細心なるもの、簡素輕妙なるもの、花に草に山に水に一片の自然觀亦丹青の技ならずんは能はさるところ、眞面目なる研究僅かに年餘の此會亦望を屬さるべからず、やかて丸山先生の精密切實なる講評あり、耳を傾くるもの問を發するの作者、苦心一ヶ月の作、於是乎遺憾なかるべし、河合大下の先生亦簡切の評言あり、次て一般の互選となり一等より五等迄の等位を定む、

終つて言問の團子に一座團欒、茶を啜つて坐談哄笑時の移るを知らず、例によつて丸山先生の奇言妙語又一坐の願を解かしむ

るものあり、隔てなき師弟の關係意は言外にありとす、而して興未だ盡きざるに、日已に傾き道愈く遠し、五時に近く散會す、

密かに思ふ師弟に於ける懇情切意、於之乎全きといはざるべからず、我等が主義は高尚なるところにあり、質素なるところにあり、誠實なるところにあり、而して然も無邪氣なるところに存す、必ずしも其間一點の邪氣も、一片の猜疑をも含まざるなり、世の徒らに虚禮に走り佞媚をこととする輩と同一ならざるなり、苟も自然を憧憬し美神の懷に抱擁せらるるもの、亦如此ならずして可ならんや、或は亦世の所謂似而非藝術家なるものあり、詩を作るも繪を賞するも、眞に此等の點を解せざるもの多々也、華奢傲慢の士は權勢のものと雖も我等は與せず、今一日の清會、佳肴を吻まず、婀娜を擁せざるも、悠々として我事足れり矣、

(はん)

日も昏れたれば、急げや急げと、疾驅して下るに、だらだら下りの坂道にして、路も埋まるばかりにオンパコ叢生したれば悦



野花 大藤次郎筆

ぶこと限りなし、凡そその畔なると堤たるとを問はず、オンパコは必ず人に踏まれたる土ならでは、生えぬものなれば、路に迷ひたる人は、オンパコを道知るべの草として、その在るが方へ迎れば、人里に出ですといふことなし、云々。

これは小島烏水氏の槍ヶ嶽探險記の一節なり、旅行家は心得置くべきことと思へば茲に借用す。(編者)

夫れ葉も縁なり、蔓も翠なり、其は天地皆一青のみ、我おもふに、若し色そのものに重量ありとすれば、青は最も重かるべし、濃ければなり。今見わたす限り、村家の軒を這ふ絲瓜も青く、垣に巻舒する零餘子も青く、たゞその間に離々點々、鳶色の藁屋根を露はすのみなれど、それすら闇きほどに縁を浴びて、中に棲まへる人は蠢々として芋蟲の如く青からんとす。其の大地はこの億萬斤の重量に堪へて、能くみじろかざるなり、我は天の崇高を説くものにして、何故に地の壯嚴を讚嘆せざるかを恠しむ。(山水無盡藏)